

## イオンシネマのベンチにて

野々宮  
望月清美

宮岡すみれ  
島貫

中学生たち（1、2、3）

ショッピングモール MAX 福島の5階、イオンシネマへの出入り口付近にある中途半端なスペース。ベンチが中央にある。

宮岡と3人の女子中学生が座り、やや離れて、野々宮が立っている。  
中学生たち、それぞれスマホをいじっている。

中学生1 「ねこカフェ」  
中学生2、3 「え」

島貫が来る。

島貫 「あれ」  
宮岡 「あ、来てたの」  
島貫 「うん」  
宮岡 「島貫くんとか、興味ないって思った」  
島貫 「ま、一応」  
宮岡 「院、受けたんじゃないかったの、東京の大学の」  
島貫 「なんか、迷っているうちに、終わっちゃった」

中学生1 「わ、見て」

中学生2 「まじ、うざ」  
中学生3 「靴、見えないし」  
中学生1 「2階にいるって」  
中学生2 「来るって？」  
中学生3 「来ないっしょ」  
中学生1 「通信制限やば」

宮岡 「なんか、変」  
島貫 「え」

中学生3 「ソースカツってげってなる」  
中学生1、2 「なるなる」

宮岡 「いや、なんか、スーツ」  
島貫 「あ、そう」  
宮岡 「誰かと思った」

島貫 「いいところあった？」  
宮岡 「話、聞いたのは、二つくらいかな」  
島貫 「へー」  
宮岡 「ちょっと休憩」  
島貫 「なるほど」

中学生2 「スパゲティー食べたい」  
中学生1 「食べたい」  
中学生3 「食べたくない」

島貫 「地元ばかりで、びっくりした」  
宮岡 「まあ、ね」  
島貫 「宮岡さん、こっちで、就職するんだ」  
宮岡 「今のところは、そうかな」  
島貫 「へー。仙台とか」  
宮岡 「射程範囲かな」

島貫「戦場みたい」

宮岡「29日のビッグパレットも行くけど」

中学生1「ねこ、無理」

中学生3「え、なんで」

中学生2「ご飯に猫毛はいるっしょ」

宮岡「東京は無理かな」

島貫「あ、そう」

宮岡「なんか、親がうるさくて。あ、でも何社かあったよ。関東圏っていうのかな」

島貫「ふーん」

中学生1「そうじゃなくて、犬好きだし」

中学生2「むっちゃ可愛いー」

中学生1「犬、可愛いー。一緒にバナナジュースとかいらんし」

中学生3「トイプードル足折れそー」

島貫「え、映画。見るの」

宮岡「まさか。そんな気分じゃないよ。なんか、知り合いに会うと面倒でしょ」

島貫「うん？」

宮岡「ここなら、誰もいないから」

島貫「ああ、そうか」

宮岡「こんな格好してると、浮くけど」

島貫「いや、そうでもないけど」

宮岡「下じゃ、逆でしょ。色、全くない。覚悟はしてたけど、なんかうんざりしちゃって」

島貫「まあね。異常だよな」

中学生2「うちの母さん、声ちっちゃいんだけど」

中学生1「うち、でかい」

中学生2「ドトールで、え、え、え、もっと大きな声で言わないと聞こえないって言った  
ら、めっちゃ隣の男の人に睨まれたんだけど」

中学生3「あ、受かったって。お姉ちゃん、福大受かったって」

宮岡「しかも誰も文句言わないで、コミュニケーションシート書くて日本人っぽい」

島貫「あ、あれ、書いた？」

宮岡「うん」

島貫「え、書いてどうすんの」

宮岡「受付に出して、資料もらって、いろんなどこ回って、話聞いて、いいところあったらまた出すの」

島貫「なるほど」

中学生2「大学とか、行く？」

中学生3「行く」

中学生1「行かない」

島貫「何時まで、だっけ」

宮岡「え、説明会？」

島貫「うん」

宮岡「5時まで」

島貫「そうか。ちょっと、飲み物買って来る。あ、宮岡さん、なんか飲む？」

宮岡「あ、いらない」

島貫、去る。

宮岡「あの、会いましたよね。いわきに行く、電車の中で」

野々宮「え、あ、そうですか」

宮岡「ええ。ほら、なんか、外国から来た人がいて」

野々宮「ああ、はいはい」

宮岡「いや、なんか、さっきから、ちょっと気付いてて。声、かけようかなって思ってた」

野々宮「え、あれ、そうなんですか。あの時の、ですよ。そう言えば、なんか見覚えあります」

宮岡「いわきの改札まで、一緒に行きましたよ」

野々宮「ああ、そうでしたね」

中学生1「行こう」

中学生2、3「うん」

中学生たち、去る。

宮岡「エスカレーターで振り向いたら、目があったでしょ」

野々宮「ええ」

宮岡「ねえ。なんか、そうですね。あれって、なんか、ひどいですよね、とか、私思っ  
てて、その時、その想いを目配せして送ったんですよ」

野々宮「え、あ、そうですか」

宮岡「ええ、そんな感じで目があったんです」

野々宮「そうか」

宮岡「私のほうは、そんな気分であなたと目があってました」

野々宮「ああ。そうか、ちょっと私は、そこまではわかりませんでした」

宮岡「え。目、あいましたよね」

野々宮「え、あ、はい」

宮岡「目、あったんです。ちょっとニッコリとかして」

野々宮「そうでしたか」

宮岡「そうそう。それで、その人、その外国から来た人が、駅、乗り越して困ってて」

野々宮「どこで降りていいのかわからなかったんですよ。きっと」

宮岡「それで、親切な乗り鉄のおじさんが、車掌さんに相談してくれて、とにかく次で降  
りて、いわき方面から折り返して来る電車に乗ったらいいってことになって」

野々宮「……大丈夫だったかな、あの人」

宮岡「そうか、私はてっきり、あなたもそんな気持ちでいるって思ってたんですけど」

野々宮「え」

宮岡「目があった時にです」

宮岡「あ、いえ。なんでもないです」

野々宮「どこから来た、人だったんだろう」

宮岡「ネパールとか、言っていました」

野々宮「へー。ネパール」

宮岡「あれ、昨日でしたっけ」

野々宮「いや、二日前とかでしょ。水曜日でしたから」

宮岡「そっか」

宮岡「ごめんなさい、なんか、急に」

野々宮「いえ。……就活ですか」

宮岡「はい」

野々宮「合同企業説明会」

宮岡「ええ」

野々宮「上がって来るとき、見ました。……頑張ってください」

宮岡「ありがとうございます。……映画、ですか」

野々宮「ああ、いや、ま、ちょっと」

宮岡「なんか、私、今、びっくりしてます」

野々宮「え」

宮岡「目があっただけの人とまた会うとかあるんだなって思って」

野々宮「ああ。でも、ほら、あんなことも、あの車両の中であつたから」

宮岡「え」

野々宮「目があっただけってわけじゃないですよ」

宮岡「え、ああ、ま、そうですけど。目があうまではお互いに同じところにいたってわからなかったでしょ」

野々宮「あ、そうか」

宮岡「しかも、ほら、こんな風に話しかけたりして。普通じゃないですよ」

野々宮「いや、ま、そんなことはないですよ」

島貫、戻る。

島貫「カップルと中学生ばかり」

宮岡「ああ」

島貫「じゃ、おれ、行くよ」

宮岡「あ、うん」

島貫「また、四月に」

宮岡「え、受付行くんじゃないの」

島貫「行くよ。宮岡さんは？」

宮岡「ま、多分」

島貫「多分、なに」

宮岡「うーん、行く、かな」

島貫「じゃ、すぐまた会うかも」

宮岡「うん。じゃね」

島貫、去る。

野々宮「いわきなんですか、家」

宮岡「ええ。実家が。でも、いつもはバスですね」

野々宮「わりと、かかりますよね。電車だと」

宮岡「そうですね」

野々宮「っていうか各駅停車ですからね、ディーゼルカーの」

宮岡「日本に来て、すぐって感じでしたよね、あの人」

野々宮「ああ、あの外人さん」

宮岡「成田から直行っていうか」

野々宮「薄着でした」

宮岡「そうそう。なんか、シャツの上に上着一枚だった」

宮岡「除染の仕事ですかね」

野々宮「そうかな、きっと」

宮岡「相当焦ってましたよね」

野々宮「あ、そうですか。そこまではわからなかったな」

野々宮「ああ。そうなんだ。大変だな」

中学生たち戻って来て、また、去る。

中学生1「パーリーピーポー。パーリーピーポー」

中学生3「え、なになに」

中学生2「ジモティピーポー。ジモティピーポー」

中学生3 「え、なにになになに」

宮岡「だって、ひどいんですよ」

野々宮「え、どうしたんですか」

宮岡「夫婦づれがいたでしょ」

野々宮「え、ああ、いたかな」

宮岡「その人の荷物があるって、その夫婦づれの旦那さんの方が急に騒ぎ出して。上の荷物置くところに、なんか旅行鞆っていうか、スーツケースが残ってて、これはさっき降りた外人さんのじゃないかって、言っ、あの乗り鉄のおじさんのところに言いに行ったんですよ」

野々宮「ああ、なんか、そういえば、ちょっとした騒ぎになってましたね」

宮岡「そうでしょう。で、乗り鉄の人が、車掌さんにも報告して、大変だこれ、さっき降りた外人さんが忘れてったってことになって。乗り鉄の人も、あいつ何やってんだとか言っ、

野々宮「ああ。そうでしたね」

宮岡「自分が早く降りろって勧めたりしたもんだから、責任感じたんですよ」

野々宮「よく、そんなに観察してましたね」

宮岡「旦那さん、奥さんからも、パパ、いいことしたわねって言われたりして」

野々宮「そうだ。でも、それ違ってたんですよ」

宮岡「そうなんです。終点のいわきで、あれ、私の荷物がないってなってる女の人がい、あ、それ、私のってことになってました」

野々宮「はい、そうだった」

宮岡「荷物のこと言い出したの、あの夫婦づれのおじさんだったのに、知らんふりして帰っちゃうし。奥さんに、あ、まずい行こ行こことか、言っ、

野々宮「え。そうなんですか。あ、だからか、乗り鉄の親父、困ってましたよ」

宮岡「あの夫婦、ちょっとなんか嫌な感じだったんですよ。窓から、日差しが入って来るたび、あっちこっち席移ってたし」

野々宮「ちょっと怒ってたな」

宮岡「乗り鉄のおじさんでしょ」

野々宮「ええ」

宮岡「だって、張り切って、車掌さんに相談してたの彼だったから。騒ぎの発端作っ、おいて急にその本人がいなくなったから、びっくりしたんですよ」

野々宮「そうか、それでか、あれ？あれ？おっさん！あいつ、とか言っ、



宮岡「……いわきに行く途中ずっと、窓の外見てたら、私、あの人のこと考えちゃって、ずいぶん悲しくなっていたけど。……あの人って、あのネパールの男の人です」

野々宮「ああ、はい」

宮岡「……荷物と、いつか再会するのかなとか、パスポートとかお金とかもきつと荷物の中だし現場に行って、大慌てするんだろうな、とか、そんなこと、真剣に考えてただけど、あ、なーんだってなっちゃって」

野々宮「でも、よかったですよね」

宮岡「そう、よかった、本当によかったです。あの荷物があの人のじゃなくて」

望月、来る。

野々宮「あ」

望月「なに」

野々宮「え」

望月「あんな写真、ラインしないでよ」

望月「なに、つけて来たの、ここまで。バカじゃないの」

野々宮「スタバで一緒になって」

望月「誰と。え、安井さんと？」

野々宮「うん」

望月「で、なに。いるの安井さんも」

野々宮「映画館入ってったよ」

望月「気づかれなかった？」

野々宮「おれのことなんて知らないでしょ」

望月「変なのいるとか思うでしょ。後ろちよろちよろしてたら」

野々宮「わかんないように尾行しました」

望月「なに、それ。なんなの」

野々宮「どこ行くんだろって思ったから。女の人も一緒だったし」

望月「知らないわよ、そんなこと。ほっとけばいいじゃない、そんなの」

望月「ね、とにかく、仕事の邪魔しないでよ」

野々宮「そうだけど、気になるでしょ」

望月「気にならない。もう、まったく気にならないから」

野々宮「清美さん、気になってるでしょ」

望月「なんでよ。なんでそんなこと言うの。え。なんで言えるのよ」

野々宮「お茶でも飲み行く？」

望月「そんなに時間ないから、私」

野々宮「え、なに、歩いて来たの、図書館から」

望月「……」

野々宮「寒かった？ 寒いよね、今日」

望月「もう関係ないって言ったでしょ」

望月「なによ。なにがしたいのよ。……だから、なんなの、呼び出したの、野々宮くん  
でしょ」

望月「写真とかさ、送って来たら、気分悪いし、強引に、これ、呼び出されたようなも  
ん  
でしょ」

野々宮「さっき、入ってったから、2時間は出てこないかな」

野々宮「なんの映画、観てるかまではわからないな」

望月「どうして、あの人のことを、私が知りたいって思うの。ね、いまさら、なんで。  
おかしいじゃないの、そんなの、なんかさ、変でしょ。野々宮くんと私のこととあの人の  
ことがどうして、今、ここで関係してるのかな」

野々宮「え、え、もう一回言って」

望月「やだ」

野々宮「え、どういう意味？」

望月「私、もう、行くね」

野々宮「あ、そっち、今日行っていいかな」

望月「帰り遅いからだめよ」

野々宮「じゃ、部屋で待ってるから」

望月「ちょっと、やめてよ」

野々宮「コーヒー飲もう」

望月「いやだって」

望月「……ね、カギ、返して」

野々宮「え」

望月「カギよ、部屋のカギ。返して」

望月「も、いい。あとでまた、話すから」

野々宮「送るよ」

望月「いいって。ね、いいから」

望月、去る。

宮岡も、中途半端な会釈をして、去る。

中学生たち戻って来て、

中学生1「ななつ星ってソッコー売り切れだっておばあちゃん言った」

中学生3「え、なにになに」

中学生2「イシキタカイケーイシキタカイケー」

中学生3「え、なにになになに。教えてよー」

中学生1「むらさきイモのおしるこ食べたーい」

と、また、去る。

野々宮は、イオンシネマの人の集まりを眺めている。